ポスター番号14　　**実践発表**

地方センター校での日本語教育実習
—文学部に設置された日本語教師養成課程の場合—

馬場良二（熊本県立大学）

１．はじめに

子どもたちはみな天才で、どんなにすぐれた理論でも、分析、解明しきれない言語の細部までをいともたやすく身につける。しかし、それには豊かな言語環境とやすらいでひらかれた心が不可欠だ。夏休みの輝く三日間、楽しい宇宙を提供できていると信じている。

２．熊本県立大学日本語教師養成課程のカリキュラムと体制

熊本県立大学には、1988 年に文学部副専攻として日本語教師養成課程が設置、その後、主専攻課程が増設された。副専攻では、1 年次前期「日本語教授法Ⅰ」音声学、日本語の音声、「日本語学概論Ⅰ」現代の日本語、後期「日本語教授法Ⅱ」文字・表記、文法、「言語基礎論」言語学の基礎、2 年次前期「日本語教授法Ⅲ」、後期「日本語教授法Ⅳ」教授法と指導案作成、「現代日本語の分析」言語学的な分析、そして、文学関連の科目、専攻以外の外国語、計 22 単位が求められる。主専攻では、これにくわえて、通年科目の「**日本語教育演習Ⅰ～Ⅲ**」（2～4 年次）国内外での教育実習、「日本語教育特殊研究Ⅰ、Ⅱ」（3、４年次）作文の誤用分析と卒論指導、3、4 年次前期の「日本語教育教材研究」、「日本語教育評価法」、そして、卒業論文が必要となる。

３．「日本語教育演習Ⅰ～Ⅲ」について

「**演習**」は通年科目で、2 年次から 3 回履修、単位にできる。内容は、「教育実習」の準備と実施、振り返りと報告書の作成で、来学した姉妹大学の研修団への日本語教室、市内センター校（黒髪小学校）での夏休み日本語教室、韓国、中国、インドネシア、ポーランドの大学の日本語学科、米国の高校の日本語の授業が実習の場となる。履修者はこれらの実習先から希望するものを一つ、ないしは、二つ選んで実施する。模擬授業は、時間外に実習生が自主的に行っているインドネシア以外の実習では、カリキュラムの流れにはいるのではなく、単発の授業を用意している。基本的に「日本語を教える」ことを求めず、「日本語を使って何かをする」ように指導している。

黒髪小学校での実習生には、日本語支援を必要とする子どもたちが集まる数少ない機会なので、みんなが仲良く、楽しくなれる授業を工夫するように指導している。

４．熊本市センター校での実習について

4.1. 熊本市のセンター校

熊本市は、1999 年に文部省「外国人子女教育受入推進地域指定事業」をうけ、黒髪小学校がセンター校となった。このとき、運営委員となり、その縁で 2003 年から夏休み日本語教室を持たせていただき、教育実習の一つとしている。2012 年には、桜山中学校もセンター校となった。

4.2. 「日本語教育演習」と「実習」

「演習」は日文、英文の学部 2 年生から 4 年生と博士前期課程の学生[1)]が履修している。4 月から 5 月にかけて、記録動画を見ながら前年度の実習の報告を受け、各自の実習先を決めていく。5 月から 7 月にかけて指導案を作成し、教室で発表、討論。7 月下旬に、黒髪小学校で、前期日本語教室 3 日間があり、実習生は見学をする。ただ、例年、試験期間と重なるため、見学者は多くない。見学した実習生が授業の様子を撮影し、大学で視聴する[2)]。3 日目に打ち合わせ①があ

り、子どもたちの年齢、滞日期間、日本語力、母語、性格、各クラスの特徴などの情報を先生方から聞き、実習生の担当するクラスを決める。8 月中にクラス担当の教員と指導案についてラインでやり取りし、授業のイメージをつめていく[3)]。8 月下旬の 3 日間に日本語教室を実施[4)]、最終日に先生方と振り返りの会を持つ。10 月に授業で動画をまじえて報告、文字起こしをふくんだ報告書を作成し、3 月に研究室報告集として刊行する。

4 名から 7 名のクラスを教員 1 名と実習生数名で担当するので、情報が行き渡りやすく、教員の指導も徹底する。そのためか、おおむね評価は高い。

4.3. 時間割

3 日間の最初の時間は、3 クラス合同のレクリエーションで、子どもたち同士、そして、子どもたちと実習生とが親しむ時間とした。休み時間も子どもたちと触れ合うようにし､教室の最後には、クラス単独のレクリエーションも設けた。「課題」は、夏休みの宿題の時間である。

表1　時間割

担当	28日（月）	29日（火）	30日（水）
Bクラス	合同レク	トクヤマ	イズモト
低学年	フジタ	イ	イケダ
6名	イケダ	レク	フジタ
Cクラス	合同レク	課題	課題
中学年	ホンダ	ヒガシ	ヤマグチ
7名	カワウチ	ゾ	レク
Dクラス	合同レク	ハ	タケヤマ
高学年	サワムラ	タケヤマ	サワムラ
4名	ハ	課題	レク

4.4. 実習内容

クラスは多国籍で、子どもたちのプロフィールを見ながら一から授業を考え､指導案だけでなく、教具、プリント、板書の仕方まですべてを立案、組み上げる。楽しいことを第一に、実践的で基礎的な日本語力が身につくよう、実習生たちは知恵をしぼっている。例えば、物をくらべる／おつかい、買い物ゲーム／夏休みの俳句、絵日記／なぞなぞを作る／芸術作品を見て描写し、感じたことを発表する／手拍子をとおして、特殊拍の感覚を身につける／動物や食べ物の紹介をする／職業を知り、将来のことを考える／オノマトペかるた／虫の名を覚え、色や形を説明する、など。

５．実習生が学んだこと、そして、これから

日本語教授の面からは、模擬授業の大切さを身をもって知る／経験が、「次はもっとうまくできる」という自信につながる、広い意味では、レクリエーションで折った折り紙が手元にのこっている。

子どもたちの豊かな言語環境に最も大切なのは親、そして、同年代の子どもたちだ。日本語教室の休み時間、熊本市内から集まった子供たちの共通語は日本語で、仲がいい。実習生が行くだけで子どもたちは喜び、それを受入の先生方はのぞんでいる。実習生も子どもたちと楽しいときをすごす。子どもたちにとって、輝く夏休みの三日間になっている。この経験を次年度の実習生に引き継いでいき、より充実させていかなければならない。

注）

１）博士前期課程での科目名は「日本語教育実習」で半期科目。

２）特に 2 年次の実習生は、教壇に立つこと自体がはじめてのことが多い。動画で、子どもたちの日本語力だけでなく、元気な様子を見て、「かわいい」と漏らし、緊張がやわらぐことがあった。

３）この時、過去の実習の記録動画が参考になる。

４）この間、板書の仕方、教具の選択など、具体的な指導をいただいた。